

フレンチ・ブルドッグとボストン・テリアにおける慢性腸症の回顧的検討

○小出美沙紀¹⁾³⁾ 大野耕一¹⁾ 福島建次郎¹⁾ 金本英之¹⁾ 内田和幸²⁾
 チェンバーズ・ジェームズ²⁾ 辻本 元¹⁾

1) 東京大学動物医療センター・内科系診療科 2) 東京大学獣医病理学教室
 3) 井笠動物医療センター・小出動物病院

【背景と目的】

短頭種の犬で重度の呼吸器症状を呈する場合は逆流性食道炎、胃十二指腸炎、幽門粘膜過形成などの消化器疾患が見られることが多いと報告されている。フレンチ・ブルドッグとボストン・テリアは、近年国内で人気が高く、当院では難治性で重度な慢性腸症の症例が多い印象がある。

そこで本研究はフレンチ・ブルドッグとボストン・テリアにおける慢性腸症の診断頻度や臨床的特徴を明らかにすることを目的として回顧的に検討を行った。

【材料と方法】

2007年から2016年の間に東京大学動物医療センター（VMC）に来院した全犬種のうち、電子カルテ上で腸炎、慢性腸炎、タンパク喪失性腸症、消化器型リンパ腫と診断されている症例を用いて診断頻度を検討し、その中から3週間以上の消化器症状を呈する、一般的な対症療法にて改善しない、消化器症状を引き起こす他疾患が認められない、病理組織学的に小型リンパ球の浸潤が確認されたフレンチブルドッグとボストンテリアを臨床的特徴の検討に用いて、シグナルメント、症状、既往歴、血液検査所見、犬IBD活動性指標（CIBDAI）、腹部超音波検査所見、病理学的所見、リンパ球クローナリティー検査について回顧的に検討した。

【結果】

研究期間中にVMCに来院し慢性腸症と診断されている全犬種中、慢性腸症と診断されているフレンチ・ブルドッグは38例、ボストン・テリアは24例で、オッズ比はそれぞれ2.17と4.48であり、全犬種の中ではオッズ比が高く慢性腸症になりやすい犬種であることが分かった。（表1）

病理学的に確定診断した症例はフレンチ・ブルドッグ22例、ボストン・テリア14例で、シグナルメントは2犬種ともに雄に多く、症状は下痢を呈する症例が多く認められたが、短頭種気道症候群はフレンチ・ブルドッグの2例のみであった。CIBDAIのスコアでは2犬種ともに6割が中程度から重度の臨床症状と判断された。血液検査では2犬種ともにTP、ALBの低下を認め、蛋白喪失性腸症の病態をとる症例が多く存在した。病理学的検査では2犬種ともに病変は十二指腸と回腸に多く、フレンチ・ブルドッグの方が重度の症例が多かった。病理組織学的診断では低悪性度消化器型リンパ腫はそれぞれ1例と5例で、リンパ球クローナリティー検査では慢性腸炎の症例においても陽性的場合が多く認められ、必ずしも病理組織学的診断とは一致しなかった。

予後に関しては生存期間中央値はそれぞれ2947日、1410日であった（図1）。また予後因子の検討では、フレンチ・ブルドッグではCIBDAIのスコアが重度である方が、ボストン・テリアでは低悪性度消化器型リンパ腫、リンパ球クローナリティー検査陽性の症例の方が予後が悪い結果となった。

【まとめと考察】

本研究から日本国内ではフレンチ・ブルドッグとボストン・テリアは慢性腸症の好発犬種である可能性が示唆されたが、短頭種気道症候群との関連は見られなかった。フレンチ・ブルドッグではCIBDAIのスコアが予後因子となることや病理組織学的に重度な症例が多いにも関わらず予後が比較的良い一方で、ボストン・テリアでは病理組織学的に重度な症例は少ないにも関わらず1年以内に斃死する症例が多ことや低悪性度消化器型リンパ腫やリンパ球クローナリティー検査陽性の症例で予後が悪い結果となり、2犬種間でも臨床的挙動が異なることが示唆された。

今後はさらに症例数を増やし、これらの犬種の慢性腸症の臨床的特徴について解析を行う必要があると考えられた。

表1 VMCでの全犬種における慢性腸症の診断頻度

Dog	慢性腸症	その他	オッズ比	95%CI
全犬種	714	17406		
ボストン・テリア	24	134	4.48	2.89-6.94
ケアン・テリア	7	43	3.99	1.82-8.74
ジャーマン・シェパード	6	58	2.53	1.11-5.76
フレンチ・ブルドッグ	38	438	2.17	1.55-3.05
ジャックラッセルテリア	16	192	2.05	1.23-3.42
マルチーズ	33	480	1.70	1.19-2.44
パピヨン	30	481	1.54	1.06-2.24
雑種	42	1428	0.69	0.51-0.95
チワワ	41	1456	0.68	0.5-0.94
シー・ズー	21	903	0.55	0.35-0.85
ラブラドル・レトリバー	10	662	0.35	0.19-0.66
ゴールデン・レトリバー	6	594	0.24	0.10-0.52

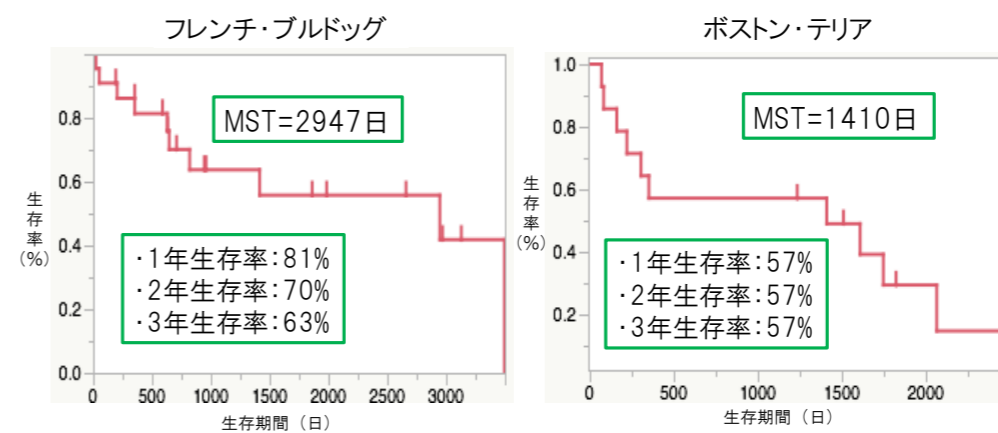


図1 生存期間